

人体病理学・病理診断学分野

教授退任にあたって

総合病院 国保旭中央病院
遠隔病理診断センター長

深山 正久氏 (昭53卒)

私は1999年7月に人体病理学分野教授として着任し、2003年からは病理診断学分野との統合に伴い、人体病理学・病理診断学分野として病理学の教育・研究・診療を担ってきました。退任・定年退職にあたり、この間の学内外の関係者の方々のご支援、ご厚情に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

病理医として

1978年に医学部を卒業し、初めは呼吸器科医を目指しました。肺の病気においても細胞生物学的なアプローチが重要になると考え、病理学を学んでおこうと思いました。東京都養育院附属病院内科で、先輩の呼吸器科医が胸部X線像と剖検肺との対比を詳細に行っておられ、病気の真の姿に到達するためには「実際の臓器の変化を見ないといけない」と思ったことは、病理を学ぼうと思った大きな動機でした。そして1981年、都立駒込病院の病理科に勤務、病理の道を歩み始めました。肺に限らず、臓器、組織、細胞の病変を診断するうちに、形態の変化とその背後の病態を読み取り、一方で全身に及ぼす影響を推定する、そうした病理診断、病理解剖の醍醐味にどっぷりと漬かっていました。当時、病理学の道に進む人は大学の病理学教室に所属するのが普通だったので、私の経歴は異例ですが、現在の専門研修の先駆者ということになるかもしれません。

病理学研究

私は当初、呼吸器病理を志しましたが、EBウイルス関連腫瘍、胃癌を研究の中心に据えることになりました。そのきっかけは、膿胸関連リンパ腫がEBウイルス感染細胞に由来することを発見したことです。同



▲ 2011年4月30日、第100回日本病理学会終了時に教室員と壇上で記念撮影。日本全体が大震災、原発事故からの復興に向け、立ち上がり歩み始めた時期だった。

診断、病理解剖を担いながら教育、研究を行うというように、病理学講座の任務分担を明確にしました。そして人体病理学と病理診断学分野を統合し、病院の病理部と一体的に運営する現在の体制を作り上げました。宮園先生、当時の医学部長桐野先生のご支援に改めて感謝申し上げます。

今後、東大をはじめ世界の若き病理学者によって、様々な病理学研究が切り拓かれ、「病气と死に学び、病者に燈火を」掲げ続けてくれることを心より願っています。鉄門の皆様、人体病理学・病理診断学への更なるご支援をお願い申し上げます。

えました。その後、この胃癌において遺伝子プロモーター領域の配列のシトシンに広範なメチル化が起こっていることを見出しました。さらに胃上皮細胞にEBウイルスを感染させ、広範なメチル化異常を再現することに成功し、ウイルスと宿主ゲノムでの異常の時間的経緯を明らかにすることができました。「ウイルスと宿主相互作用による癌化」という大きなテーマの中に位置づけられます。

次世代病理学、相互検証

私は当初、呼吸器病理を志しましたが、EBウイルス関連腫瘍、胃癌を研究の中心に据えることになりました。そのきっかけは、膿胸関連リンパ腫がEBウイルス感染細胞に由来することを発見したことです。同時に、胃癌の10%弱にEBウイルス感染が密接に関係することを明らかにし、胃癌の分子機構の解明の突破口になるのではないかと考えた。胃癌研究においては、2000年に東大教授として初めて迎え入れた大学院生の石川俊平君（現在、衛生学分野教授）が、その後、びまん性胃癌のゲノム解析でRhoA変異を同定するなど、分子メカニズム研究を進めてくれました。また、胎児期の消化管上皮細胞の遺伝子発現をもとに胃上皮細胞分化という観点から研究を進めているのが、同じく大学院一期生の牛久哲男君（現在、人体病理学・病理診断学分野教授）です。こうした多方向のアプローチで、「個別化治療に向けた「胃癌病理学」の構築に貢献することができた」と思っています。

私は帰国から10年、都立駒込病院に続いて関東通信病院、自治医科大学を経て、1999年に東大人体病理学分野教授として赴任しました。当時、東大では病理学教室、病院病理部をどのような体制で運営するのか、模索が続いていました。分子病理学の宮園教授にご相談し、分子病理学分野は細胞・分子機構解明を主体にし、人体病理学は病理

最後に

2011年、「次の